

飛鳥・藤原40年の春秋

最近知ったことですが、奈良県産の「ヒノヒカリ」は、全国米品評会で特Aランクの評価を得ている美味しい米です。この米生産を支える灌漑用水が、吉野川分水です。吉野川分水路線の建設に際し、飛鳥地域では多くの重要遺跡が通過対象となり、それを契機として遺跡の調査が始まりました。1956年以来、国の要請を受け、当時の奈良国立文化財研究所が平城宮跡の発掘調査を中断して、飛鳥寺や川原寺、伝飛鳥板蓋宮跡を調査しました。それらの調査で大きな成果をあげたことは、皆さんご存知のとおりです。

その後、藤原宮跡を含む飛鳥地域の遺跡の調査と保存は、国家的事業として実施されることとなりました。奈文研は、1969年に藤原宮跡の調査を奈良県教育委員会から引き継ぎました。そして、1970年の飛鳥藤原宮跡発掘調査室の設立を経て、1973年4月12日に飛鳥藤原宮跡発掘調査部が総勢20名の人員で発足したのです。以後、飛鳥藤原地域の調査研究は、藤原調査部(現 都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区))が継続的におこなってきました。

当初の調査部は、藤原宮跡東南隅の一面に設けたプレハブの仮設庁舎住まいでした。人数も少なく、家庭的な雰囲気だったようです。私も新人時代に藤原調査部を訪ねると、プレハブの庁舎で歓待してもらった記憶があります。しかし、今では新庁舎が建ち、プレハブ時代を知る人もごく少数になりました。ちなみに、状態の良い3棟のプレハブは、現在



現庁舎と40年目の人びと

の庁舎の完成にともない、平城に「遷都」していきました。平城宮跡大極殿院の西方にある土器や瓦、木器のプレハブがそれです。唐招提寺の講堂を彷彿とさせます。

これまで藤原調査部は、藤原宮・京と飛鳥地域を2本の柱とし、調査研究を続けてきました。藤原宮・京の調査では、日本最初の中国式都城について様々なことをあきらかにしてきました。飛鳥地域では、寺院や石神遺跡、また、近年では甘檜丘東麓遺跡等、多くの遺跡で継続的な調査を続けてきました。山田寺では、タイムカプセルから出現したように、倒壊した回廊が見つかりました。世界最古の木造建築の発見でした。石神遺跡の一連の調査で確認した遺構群は、飛鳥の遺跡の重要性を改めて示したところでした。大官大寺、飛鳥稻淵宮殿跡等でも、7世紀の歴史を語るに欠かせない成果を上げてきました。中大兄皇子が造った水時計の出現は誰も予想しなかったことでしたし、飛鳥池遺跡での富本銭の出土は、教科書を書き換える発見でした。幻の百済大寺の発見もありましたし、高松塚古墳とキトラ古墳の調査では、終末期古墳の研究に欠かすことのできない多くのことをあきらかにしました。このように、40年にわたる調査研究の蓄積は膨大なものがあります。

最近では調査部にも若い部員が増え、新たな視点や活力が生まれています。今後とも、これまでの蓄積をもとに、更なる調査研究と活用を進めていきたいと思います。飛鳥藤原地域の遺跡は、何が出てくるかわかりません。そこが興味深い点ですが、40年を迎えても、まだまだ惑うことばかりです。

(都城発掘調査部副部長 玉田 芳英)



甘檜丘東麓遺跡で検出した石垣